

横浜市港北区在住の作家ヒロコ・ムトーさんが、友人一家の愛犬の一生を描いた物語「天使になったシュクちゃん」(1280円・税別、文芸春秋)を出版した。先天性の心臓病を患いながらも家族に愛されて生きたキャバリア犬「シュクル」の物語を通し、「命を預かる責任や愛を伝えたい」と願う。

(佐藤 将人)

港北区作家 ヒロコ・ムトーさん

物語は主人公の犬の一人称で語られる。

仲間はみんな売れて、僕はひとりぼっちになった
売れない犬はどうなるんだらう
でも、運命の日が来た

その「運命の日」。近所に住む佐藤皆子さんが「犬屋さん」を訪れた。「なんてきれいな目なの」。生後半年近くがたち、「大特価」になっていた。「処分近かもしれない」。いてもたってもいられず、家族に迎え入れることに決めた。

家族はどこへでも連れ歩いた。旅行、デート、ドライブ。当時、皆子さんの次男と交際していた泰香さんは「けんかをしてもあの子が仲直りさせてくれた。本物の子どものようだった」と振り返る。本ではイラストレーターとして挿絵を担当。柔らかなタッチは愛犬への思いがあふれている。

一匹の重さ 伝われ

「?」。屋外の会場を探し牧師のようなマントを着せ、指輪を運ばせる「リングボーイ」を任せた。

大役を果たしたシュクル愛された犬は、最期に大きな



「天使になったシュクちゃん」を出版したヒロコ・ムトーさん(中央)と飼い主だった佐藤皆子さん(左)と泰香さん
—横浜市港北区

は、4カ月後に7歳半で死んだ。皆子さんは「あの子がいなかったら、2人は結婚しなかったかも」と笑う。家族に

恩返しをして旅立った。この話は10年前の出来事だ。ヒロコさんが友人の皆子さんから話を聞き、「涙が止まらないほど感動して一晩で書き上げた」が、長く眠らせていた。それを今回、世に出したいと思ったきっかけが、ブリーダーによる犬の廃棄事件などだった。

「この10年でペットと人の関わり方は大きく変わった。家族として人を支える一方、『商品』として簡単に捨てられる命もある。シュクちゃんの物語は、今の時代の方が必要としているかもと思った」

ヒロコさんは皆子さんのこんな言葉に感動したという。短くたって後悔しない時間をあげる。

「この本を通して、小さな命を預かるという意味、その愛と責任が伝わったらうれし」と話していた。

心臓病の犬 一生描き出版